

## 地区同窓会

## 望郷

関西岳陽同窓会

大場 義博

(高24回)

五十年前の冬の日、奈良県の飛鳥に僕はいた。粉雪が舞って寒い日だった。

(やつと来れた)

飛鳥は、憧れの地だった。万葉集が好きだった。どうしてもその舞台を見ておきたかった。

田の畔道を歩き回った。当時は、まだ観光客も少ない時代だった。飛鳥寺や岡寺、どこに行っても人っ子一人いなかった。甘樫丘に登って、飛鳥を俯瞰した。

その時、胸にこみあげるものがあつた。

あまりにも、故郷の景観に似ているのである。森が見え、川が見え、そして人家の藪が見えた。空を飛ぶ鳥、流れる雲も故郷のそれと同じだった。それから、月日が経った。

一昨年から岳陽同窓会に出

席するようになった。うかつにも故郷がこんなに身近にあつたことを知らなかった。

卒業以来、住所変更の手続きをとっていなかったため、たぶん僕は事務局にとつて所在不明者だったのだろう。

同窓会へ誘ってくれた八万の阿部さんである。感謝である。

ところで、同窓会の出席者であるが、大半が知らない人である。田川健児の歌第二番に出てくる中津原頭で学んだということだけが共通項である。それでも、会って話をすると楽しい気分になる。皆、異郷で生きているが、背中に故郷背負っているからである。人は、いくつになっても故郷を忘れられない。

万葉学者犬養孝先生の名著「万葉の旅(下)」に、次の歌が採取されている。

王の 親魂逢へや 豊国の 鏡山を 宮と定むる

解説によれば、大宰帥であった河内王は、死に臨んで、豊国の鏡山を永遠の墓所と定めたという歌である。

理由は、香春の鏡山が故郷の飛鳥によく似ていたからと

言われている。故郷は、忘れられないものなのである。